2022年4月10日 棕梠の主日（受難節第６主日）礼拝

メッセージ「表通りの子ろば」　　水谷憲牧師

聖書 マルコによる福音書 11章 1－11節

本日から受難週とよばれる、イエス・キリストが十字架につけられて、復活するまでの最後の一週間に入ります。とうとうキリストの生涯最後の一週間が始まってしまったのです。3月2日にレントに入ってからというもの、これまでの受難節の私たちそれぞれの歩みは、どのようなものだったでしょうか。マザー・テレサは、「愛の反対は憎しみではなく無関心である」という有名な言葉を残しておりました。私たちは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽してあなたの神である主を愛しなさい」との教えに従って、主イエス・キリストを愛す、神様を愛すとは言うのだけれども、しかし実際どれほどまでに、キリスト・イエスの抱えておられた心の苦しみや、最終的に受けられることになる身体の苦しみについて想像してきたであろうか。また、御自分の大事な独り子をそのようなひどい目にあわせることになっても我慢するほどに、私たちこの世を愛された神様の深く大きな愛を、どれほど感じながらこのレントの日々を歩んできたというのか。実は私たちみんなが、日常の様々な出来事に右往左往させられながら、イエスの受けられる苦難のことを、その苦難の意味を、そして神様の私たちに対する愛を忘れてしまっていたまま、何となく今日という日を迎えてしまったのではないのか。実は私たちみんな、イエスの受難に対して、またイエスをいまだに十字架へ追い込み続けている自らの罪に対して、無関心だったのではないのか。私たちは改めて、自分がいかにキリストに対して無関心であったか、自分がいかに神様への愛とはまったく反対の歩みをしてしまっていたかを問い直させられ、今こそ悔い改めなければならないように思うわけです。

さて本日は、イエス・キリストが平和の王として子ろばに乗ってエルサレムに入城された日にあたる、「棕梠（しゅろ）の主日」と呼ばれる日です。それは、イエスが子ろばにのって進まれる道に人々が自分の服を敷き、またある者たちは野原から葉のついた枝を取ってきて、それを敷いたり、手に持って振ったりして歓迎の意を表したことに由来をしています。人々が野から取ってきた「葉のついた枝」というのが、ナツメヤシ、つまり棕梠の葉だったわけです。

この熱狂的な歓迎の場面は、旧約聖書の「ゼカリヤ書」9章9節における預言と

も重なっています。「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。あなたの王があなたのところに来る。彼は正しき者であって、勝利を得る者。へりくだって、ろばに乗って来る。雌ろばの子、子ろばに乗って」 今日イエスがエルサレムへ入っていかれる際に、彼は今まで誰も背に乗せたことのなかった子ろばに乗っておられました。もちろんそれは、旧約の預言が成就するためにイエスがわざわざ選ばれたのかもしれないですし、「まだ誰も乗ったことのない」というのも、神様にささげるための「清い汚れのないもの」であるということを象徴しているのでしょうけれども、そもそもなんで「ろば」、しかも「子どものろば」なのでしょうか。「子ろば」でないといけなかったのでしょうか。

ろばという動物は、その耳の長さから「うさぎうま」とも呼ばれていますが、馬が戦争や狩りに使うために飼育されてきたのに対して、ろばは荷物を運んだり、畑を耕したり、人を乗せたりと、いつもいわゆる平和な仕事のために飼い慣らされてきたものでありました。また、ろばは病気に対する抵抗力が強く、寿命も長く、30年以上働くものもいるといいます。感覚もよく発達しており、一度通った道でもよく憶えているほど記憶力もあり、友好的な表情を見せたり、愛情を示したり、悲しい表情をすることさえあるんだそうです。そのうえ、忍耐力の点では馬よりも優れ、水が無くても相当長い旅に堪えうる性質があるために、砂漠地ではろばは馬よりも重宝されていたそうです。このように、ろばが知能や体力、忍耐力のすぐれていることに間違いはないようです。

しかし、その一方でろばはイスラエル人にとって神様へのささげものとしては役に立たない動物とされていました。その昔、イスラエルの民がエジプトを脱出することができたのは、犠牲の小羊の血を入口の扉に塗ってあった家以外のすべての家の初子が主によって打たれたという「主の過越(すぎこし)」が行われたためでした。それでそれ以後、イスラエルの民はそのことを記念して、自分たちの家畜の初子のうち、雄はすべて神様のものとしてささげるようになりました。ですが、家畜の中でもなぜかろばの初子の場合はすべて、小羊を持って贖(あがな)わなければならない、とされています(出エジプト記 13 章 13 節)。このようにろばは、当時の人々の生活の中で欠くことのできない家畜であったにもかかわらず、神様へのささげものとしてはふさわしくないとされる動物であったわけです。

しかし今日、神様はろばをキリストの道具として選ばれました。それも、労働力に

なる前の非力な子どものろばを。それはきっと、平和の象徴であるイエス・キリストが、雄々しい軍馬に乗るような強大な権力者などではなく、むしろみすぼらしく非力なろばに乗るような柔和な方であるというメッセージを打ち出すために必要だったのです。先ほどからお話しているように、ろばは大変賢く、人々の生活にとって大変重宝する動物でした。見た目に良い馬などよりも、よほど謙虚で従順な印象もあります。しかしそれでもだめだったのです。大人のろばでも立派過ぎるのです。イエスの母マリアの賛歌にこうあります。「主は御腕をもって力を振るい、思い上がる者を追い散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、低い者を高く上げ、飢えた人を良いもので満たし、富める者を何も持たせずに追い払います」（ルカによる福音書 2 章51～53節）。神様は低みに置かれた者、力のない者、何も持たない者をこそ高く用いられるのです。神様がここで選ばれたのは、まだ力もなく、仕事もできず、従順に飼い慣らされきっていないわがままな子どものろば、そのゆえに誰からもまだ目もむけられることのない子どものろばだったのです。神様は、そういう子ろばをこそ、御用のために選びたかったんですきっと。

イエスが弟子を村へ使いに出した時、彼らは表通りの戸口にまだ誰も乗ったことのない子ろばがつないであるのを見つけました。何の仕事もできなさそうな、非力な小さい子ろばが表につながれていたからといって、普段なら誰も気にも留めなかったでしょう。もう 15～6 年も前になりますが、私が教会の表に新しく買った自転車を停めていたところ、何者かが施錠したままの自転車を丸ごと盗んでいってしまったことがありました。それも取った者にとっては使い勝手があったからこそ持っていったのでしょうが、この一見とても役に立ちそうもない、魅力の感じない子ろばが表につながれていたからといって、誰も気にも留めず、何も思わなかったかもしれません。そのような子ろばが、一体どういうわけで表通りにつないであったのかは分かりません。しかし、そんな誰にも気に求めてもらえないような、いてもいなくても同じにしか思われていないような子ろばが、わざわざ表通りにつながれていたというのは、ただの偶然だったのでしょうか。もしかしたら、何か意味があったのでしょうか。もしかしたら、それこそ生まれて初めて役に立つために、それもキリストの役に立つために、神様の導きによってその場に立たされていたのかもしれません。弟子たちが子ろばをほどこうとすると、そこに居合わせた人々が「その子ろばをほどいてどうするのか」ときいておるわけですが、その言葉も、「そんな子ろばを

連れて何の役に立てようというのか、そんな子ろば、一体何の役に立つのか」というような問いだったのかもしれません。しかし、そんな何の役に立つかもわからんような、無きにも等しい者をこそ、神様は大切なことのために用いられるのだ、というのが、これまで聖書が繰り返し繰り返し、証しし続けてきたことなのです。

私たちも、そのような意味では、表通りにつながれているこの子ろばと同じなのかもしれません。私たちが毎日いろんな小さな罪を積み重ねてしまうような、弱くつまらない者であっても、また私たちが様々な能力に秀でているわけではない、むしろ自分には何の取り得もないと思ってしまうような、そんな者であっても、神様はそんな私たちをいつかこの子ろばのように、大事な役目のために必ず用いて下さるのです。もちろん、罪にまみれたまま開き直って何の反省もせず、「果報は寝て待て」という姿勢ではいけないのですけれども、私たちがその罪を神様によって洗い流していただきたいという思いさえあれば、神様はそんな私たちの元へ私たちを招きにきっと来て下さる。私たちが何もたいした事ができなかろうが、神様のお役に立ちたいという思いさえ私たちにあれば、そんな私たちを神様は見つけ出し、必ず招きに来て下さる。ですから私たち、自分のことを卑下しすぎることなく、こんな私だから神様は招きに来て下さる、こんな私だからこそ、神様はイエス様の役に立つために私を連れて行って下さるんだと信じて、ひたすら神様の招きを待ちつつ、家の奥に閉じこもっているのではなく、あえて表通りでお迎えを、神様の招きを待つ者とされたいと思います。